

郷土研究 伊丹公論

復刊 第19号 通巻38号

年4回発行 (次号は5月31日予定)

発行所
伊丹市立図書館 ことば蔵
〒664-0895
伊丹市宮ノ前3-7-4
TEL 072-784-8170
編集
伊丹公論編集委員会

復刊「伊丹公論」が19号に

小林杖吉の発行回数に並ぶ

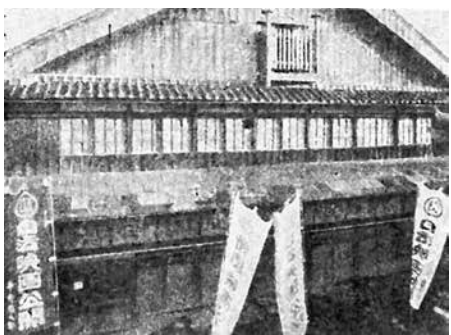
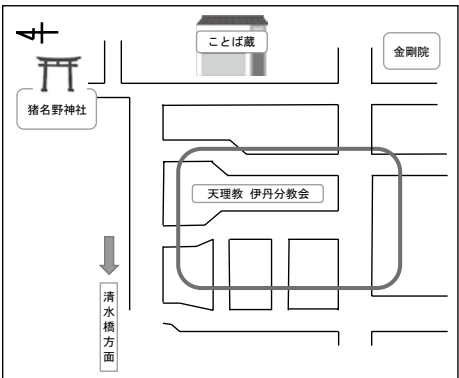
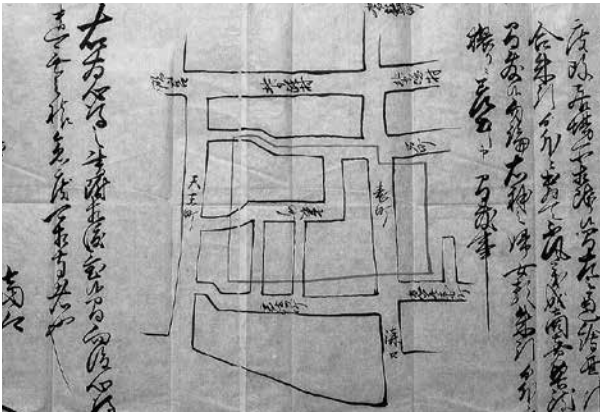
ことば蔵開館をきっかけに、平成25年(2013)に生まれた「伊丹公論」の復刊版は、本号で19号(通巻38号)を迎えた。これは昭和11年(1936)から5年にわたり計19回発行された初代「伊丹公論」の歴史に並んだことになり、感慨深い。発行者兼主筆の小林杖吉(筆名「丹城」)については、復刊第1号をはじめ折々に編集諸子により取り上げられてきたので、今回は主筆最後の記事となった「三本松遊郭」(余聞)について触れてみたい。

三本松遊郭をしばしば記事に

伊丹郷町の遊郭の始まりは、江戸時代初期の寛文・元禄(1661~1704年)ごろとされるが、確かなことはわからない。寛文といえは近衛家の領地となったところである。三本松遊郭は今の猪名野神社西側にあった。その名は、巨大な三本の松があったことに由来するという。丹城は「伊丹三本松尾のない狐、わしも二度三度騙された」の俗話とともに、その盛衰を詳しく記事にしている。

「区域は、北は天王町裏から西は宮崎町裏、南は表町の南北の両側を含む一帯で、青楼は十六軒と決められ、遊女の外出はお達しにより厳禁され

(七) 三本松遊郭を表した江戸時代の地図(左) 伊丹市立博物館所蔵
現代の地図に示した三本松遊郭があった区域(太線枠内)



昭和10年ごろの伊丹劇場
伊丹市立博物館所蔵

た。亥之助はその後どんな事件でも丸く収めた。
「以上は先年八十有歳で無くなった仲庄太郎翁の直談である」と、丹城最後の記事にはつづられている。仲氏は、郷町の学識者で長老であった。
また本号には、伊丹詩壇欄に丹城の古希を祝う詩が2編寄せられており、その中に「君実(は)楠氏(の)後裔也」という文が見える。丹城は伊丹に縁の深い、南北朝時代に活躍した楠木一族の末裔であったのだろうか。



小林 丹城

鳥取市生まれ。早稲田大学を卒業し、大阪医学校(現・大阪大学医学部)教授。のち辞書・教科書の出版や著述業に。
伊丹に居を構え、明治37年(1904)、丹城33歳のときに私財を投じて私塾三余学寮(夜間学校)を開設。明治45年には阪神間で2番目に大きい8万冊の蔵書を誇った私立伊丹図書館を開館。昭和11年、「郷土研究伊丹公論」を発刊した。
戦後の昭和25年(1950)には、初代の伊丹史談会会長に推された。

幕末のころ、麻田藩(現・豊中市)の武士二人が飲むにつれ遊女が隣室ばかりに行き、店の待遇が悪いと暴れだして刀を抜いた。亭主が謝っても聞かないので、困り果てて百日という名の酒屋で米踏みをして井屋亥之助という男を呼んできた。亥之助は最初、低く出たが、相手はつけあがり、遊女を切ると言い出した。それなら誰を切るのも同じこと、亥之助は裸になった。「手から切るか、足から切るか。さあ斬れ」。その度胸のよさに武士は青くなり、仲直りしていった。それらの古文書は今も市立博物館に残る。
「明治になって政府の方針や潔癖戸長の英断により灰滅(潔癖の表現がおもしろい)。昔の建物も「今や一つは三等郵便局(宮前郵便局)となり、二軒残るのみ」と記す。それも今はなくなった。筆者の若かりしころ、この一帯には、芝居や松竹系映画の伊丹劇場があり、時代の波に乗ってそれがストリップ劇場に大転換。東京からのビジネスマンは飛行機に乗るまでは伊丹で飲んで観て、という隠れた社会現象を生んだ。

痛快だった丹城最後の記事

三本松遊郭を取り上げた最後の記事の見出しは、次の通りである。
「三本松余聞一酒屋の百日 麻田藩の武士を凹ます」

いたみアーカイ部始動 「伊丹の酒造り唄」を世界に発信

「アーカイブ」という言葉をご存知ですか。インターネット百科事典のウィキペディアによれば「重要記録を保存・活用し、未来に伝達すること」とあります。私たち「いたみアーカイブ」は、ことば蔵を拠点に伊丹の歴史や文化、景観などを整理



ウィキペディアを編集する部員ら

して記録し、紙媒体やウィキペディアなどのデジタルコンテンツに残していく「おとなの部活動」です。普通の市民が自分たちの情報を世界に発信するなんて20年ぐらい前には考えられませんでした。今は簡単にできるようになりました。その一例がウィキペディアです。ウィキペディアはインターネットで調べものをする、常に上位に出て来る有名なサイトですが、誰でも自由に新しい項目を作ることができ、加筆・変更も随時可能なシステムです。日本語だけでなく英語やドイツ語、中国語など世界各国の言語で提供されており、写真や音声は全世界共通で使われます。

いたみアーカイ部が今、取り組んでいるのは、本紙復刊第17号で取り上げられた、50年ぶり復活の「伊丹

の酒造り唄」を世界に発信することです。まず、ウィキペディアに「酒造り唄」の項目を新規に作成。江戸時代に伊丹で始まった清酒の大量生産の現場で歌われ始めた「酒造り唄」には、工程ごとに多様な歌詞があったことを、伊丹の酒造りを担って来た丹波杜氏の作業写真付きで説明しています。

歌詞が知りたいときは項目の右上の「ウィキソース」に酒造り唄の原文があります。「バナーをクリックすると、各工程で歌われた内容を知ることができます。もう一つのバナーをクリックすれば、丹波杜氏の歌声を実際に聞くことができます。歌詞の内容は多彩で、伊丹の酒の品質を誇り、故郷の丹波の家族を思うものが多いですが、男だけの出稼ぎ仕事ゆえちよっとエッチな内容もしばしば見受けられます。歌声については、昨年10月5日にことば蔵で開催された「酒造り唄」の復活イベントに出演の丹波杜氏たちの絶大な

題字を変更しました

本紙は前号まで題字を「伊丹公論」としてきましたが、小林杖吉の発行回数に並んだ本号から、創刊当時の名称である「郷土研究伊丹公論」に変更しました。書体についても、当時の書体を模したものに変わっています。今後創刊者の想いを紙面に表してまいります。
(編集者一同)

協力をお願いしました。
ウィキソースに上げている歌詞はことば蔵の蔵書から書き写していますが、全工程の半分にも達していませんので引き続き作業を続ける必要があります。
またウィキペディアで使われる写真や歌声は、各国語のウィキペディアで共通に使えるようになっており、将来は英語版などの他言語のウィキペディアに酒造り唄の項目を作って、世界中の人たちに「伊丹の酒造り唄」を聞いてもらおうと画策中です。

歌詞の入力に協力していただける方、外国語に堪能な方、酒造り唄だけでなく種々の伊丹の文化を発信したい方、「いたみアーカイ部」に参加してみませんか。年齢、性別、学歴、居住地など不問。
毎月1回、日曜日の14時から活動。詳細や問い合わせはことば蔵へ。
(Miyama)



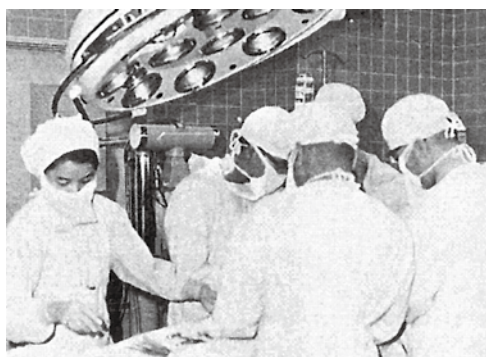
市立病院が開院60年

阪神北医療圏の中核病院に発展



市立伊丹病院が昨年9月、開院60年を迎えた。阪神北医療圏の中核病院としての使命を果たすため、生き残りかけた懸命の取り組みが続けられている。

昭和32年(1957)9月、病床百床、内科、外科、小児科、産婦人科、耳鼻咽喉科、理学療法科の6科をもって春日丘で「市立市民病院」として開院した。神戸・阪神間では、神戸、芦屋に次いで3番目の市立病院誕生であった。



▲開院当時の手術風景

そのニュースを掲載した当時の広報紙「市民と市政」で、坂上喜穂市長がまず述べているのは、病院建設への資金繰りの苦勞である。高度経済成長期を迎えていたとはいえ、まだ終戦から12年。経済的には厳しい時代であり、国、県に強く要望し、自己財源6千5百万円を上回る9千7百万円の起債を受けることにより開院にこぎつけた。

現在の整形外科手術▼



あつた。昭和37年には経営の合理化を推進するために公営企業法の全部適用となり、名称も「市立伊丹病院」へと変更された。その後、医療需要の増大と多様化に対応するため、昭和54年4月に移転プロジェクトが立ち上がり、現在の昆陽池1丁目の病院が完成したのが、昭和58年5月である。阪神間屈指の総合病院として病床数405床、15診療科で総工費81億円をかけ誕生した。玄関に取り付けられた、著名な陶芸家、加藤唐九郎の見事な陶壁が印象的である。がん治療に力を入れ、平成22年(2010)9月には、県から「兵庫県指定がん診療連携拠点病院」に認定された。また、平成23年11月には「地域医療支援病院」として承認された。かかりつけ医を支援するなど、中核病院としての役割を担う。近年は、人工関節センター、内視鏡センター、糖尿病センターなど、

市高生が授業で「俳句カフェ」

企業と共同開発の菓子など提供

市立伊丹高等学校商業科の生徒たちが昨年9月30日と10月1日の二日間、旧石橋家住宅で「俳句カフェ」



接客する商業科の生徒たち＝旧石橋家住宅で

を開店した。市内企業と共同開発した菓子の提供や琴の演奏なども行い、お客様に好評をいただいた。商業科では、1年生でビジネス基礎や簿記など経営に必要な基礎知識を身に付け、2年生でマーケティングや原価計算などを勉強、3年生の課題研究で身に付けた知識をもとにカフェ経営を行う。模擬会社を作り、生徒の中から代表者を決め、企画部、広報部、販売部といった各部署に分かれて生徒たち自身で運営する。一昨年度からのテーマは「俳句カフェ」。販売する商品を生徒同士が話し合っって選び、仕入れから販売する際の価格設定なども行う。飲食物の提供だけでなく、箏曲の演奏や

ゲーム、俳句コンテストなども企画。また、商品開発の授業では、カフェで販売する商品を市内の企業と協力して開発する。今年度は、どら焼き、レモンケーキ、ゼリー、サイダーの4商品を開発した。どら焼きには市内企業の希少糖を使用し、「たみどら」と名付けて抹茶と一緒に販売。レモンケーキには伊丹産のマイヤーレモンと希少糖を使用した。同じくマイヤーレモンを使ったゼリーは、中にバラの花びらを入れ「ローズゴジエリー」の商品名で販売した。限られた時間の中で、商品の開発を行う中で、生徒同士の意見があつ

た。昭和37年には経営の合理化を推進するために公営企業法の全部適用となり、名称も「市立伊丹病院」へと変更された。その後、医療需要の増大と多様化に対応するため、昭和54年4月に移転プロジェクトが立ち上がり、現在の昆陽池1丁目の病院が完成したのが、昭和58年5月である。阪神間屈指の総合病院として病床数405床、15診療科で総工費81億円をかけ誕生した。玄関に取り付けられた、著名な陶芸家、加藤唐九郎の見事な陶壁が印象的である。がん治療に力を入れ、平成22年(2010)9月には、県から「兵庫県指定がん診療連携拠点病院」に認定された。また、平成23年11月には「地域医療支援病院」として承認された。かかりつけ医を支援するなど、中核病院としての役割を担う。近年は、人工関節センター、内視鏡センター、糖尿病センターなど、

「ウインドサーフィン」

第5回日本一短い自分史大賞に豊中市の安藤知明さん



バリ島でウインドサーフィンを楽しむ安藤さん

ことば蔵はこのほど、「はじめての挑戦をテーマに募集していた」日本一短い自分史の大賞に大阪府豊中市の無職、安藤知明さん(76)の作品「ウインドサーフィン」を選んだ。

日本一短い自分史の募集は平成25

特色ある治療センターが充実。特に人工関節センターにおける人工膝関節置換術の手術件数は全国9位の実績を誇っている。経営面では、苦境に立つことも度々あったが、現在病床数(414床)、診療科(28)、医師、看護師等の職員数(863人)は開院以来、最大となっている。当初の「市民のための病院」から、

より責任の重い阪神北医療圏の中核病院へ。市立病院は、市の発展と共に成長を遂げてきたと言える。記事の上部に掲載しているマークは、市立伊丹病院のシンボルマークである。平成22年に一般公募のうえ決定した。伊丹の「i」をモチーフに、急性期病院として市民の生命を守る医療者が患者に寄り添う姿を描いている。見方を変えると、「笑顔」

のようにも、漢字の「心」のようにも見え、市民の笑顔を守れる病院に、という職員の思いが込められている。市立伊丹病院は、現在も国の医療制度改革が進められるなか、地域医療を守るべく、持続可能な病院をめざし、赤字解消を図る新たな取り組みを続けている。

(丸晴子)

年度から始まり、今回が5回目。昨年9月1日から募集し、市内外から昨年度の倍以上となる計379点の応募があつた。審査員は伊丹大使の坪内稔典・佛光大名譽教授、永吉雅夫・追手門学院大教授、中周子・大阪樟蔭女子大教授の3人。安藤さんは「年だからと諦めるのではなく、いくつになってもチャレンジ精神を持ち続けた。そのためにはまず健康。毎朝一万歩を目標に町内を歩き回っている。同じ時刻、同じ場所、同好の士とも挨拶、会話を交わしたりもするようになった。体ばかりではなく、頭の体操もしたいと、最近韓語にも挑戦している」と話していた。秀作入賞者は、尼崎市の福田知明さん(22)、東京都足立区の田村朗さん(26)、東京都北区の本間裕也さん(36)の3人。

大賞作品の全文は以下のとおり。◇◇◇ 70歳になり、家で毎日テレビ漬けではなんの進歩もなく、何か新しいことに挑戦してみたいと思うようになった。あれもやったしこれもやったし、あれはできっこないしこれもできっこないしと、あれこれ考えを巡らせた。それまでにやってきたことは、全て陸の上であった。「海があるじゃないか!」と、パッとひらめいた。夏になると孫を連れて訪れる海で、若者がヨット、サーフィン、ウインドサーフィン、水上スキーなどをやっていると話を聞いた。この中から選んでみるのが最も手取り早い。消去法で残ったのが、ウインドサーフィンだった。息子たちに話すと、「70歳にもなつて危険だから、絶対止めてほしい」と取りつく島もない。こう言われてがっかりもしたが、反対にファイトも湧いてきた。日本でやり始めてはばれる可能性が高いと、ここは海外でやり始めることにした。 やつて来たのは、インドネシアのバリ島。宿泊するリゾートホテルにはプライベート・ビーチがあり、マリリン・アクティビティも充実していた。70歳でもまだ十分に挑戦できると、インストラクターからのお墨付きをもらい、早速講習会に参加。始めから海に出るわけではない。まずは陸の上でボードに乗って、風の捉え方や方向転換の仕方を教わる。「なかなか行けてますよ!」と褒められ、練習に熱が入る。 午後はいよいよ海上での練習。ボード上でのバランスが取れず、ドボン。よじ登っては、またドボン。何度も繰り返し、ついに成功。腰まで海に入り込んで指示を出すインストラクターからも拍手。 2週間の滞在中、湾内を自由に乗り回せるようになった。年に関係なく努力は報われることが実証された。息子には内緒で、日本のデビューは果たしていないが、以来毎年バリ島で第二の青春を謳歌している。

この印刷物は5000部作成し、印刷経費は1部あたり18円です。

パトラン伊丹活動開始 関西初・全国8番目のチーム



走って見守るまちの安全

関西初のパトランチームが昨年10月1日、伊丹市に誕生した。パトランとは、「防犯パトロール」と「ランニング」を掛け合わせた造語であり、平成25年(2013)に福岡県宗像市でスタートした取り組み。全国で約900人のランナーが活躍している。すれ違う人にあいさつを



笑顔で走るパトランチーム伊丹のメンバー
■JR伊丹駅周辺で

しながら、薄暗い場所や住宅街を中心に、パトロールしながら走る。「健康づくり」「人とのつながり」「地域の安全」と結びつけたこの取り組みは、一石二鳥どころか、三鳥にも四鳥にもなる。

パトランチーム伊丹は、全国では8番目となる。メンバーは14人。それぞれの赤色Tシャツを着て毎月「8」の付く日に活動しており、阪急伊丹駅のタクシー乗り場前から、約5キロを50分ほどかけて走っている。男女ほぼ半々で、年齢層も20代から50代まで幅広い。また、約半数は市外在住の参加者だ。宝塚市の主婦、菅原充代さん(52)もその一人。「一人ではためらいがちな声かけも、チームで走ることですぐいぶんしやすくなる」と話す。

伊丹のチームは、官民連携が



特徴。昨年11月30日、伊丹警察署長から防犯ボランティアを委嘱されており、毎回同署員8人程度がパトランに参加。犯罪発生件数の多い場所の情報提供もしている。チームの広報を務める山内有理さん(32)は、「パトランJAPAN事務局も、警察署員と一緒に取り組むというのは新しい例だと話している。官民連携したこのモデルを継続し、また積極的にSNSで発信することで、全国に広めていきたい」と意気込んでいる。

代表を務める伊丹市の会社員、増井宏倫さん(28)は「今年1月に誕生した全国9番目の京都チームと連携・協力し合い関西での知名度を上げたい」と話している。

参加希望者はチームのフェイスブックかメール(tami@patorun.com)で。

郷土意識

伊丹の風景が切手に



フレイム切手というものを存知だろうか。自分の好きな写真やイラストなどを入れることができる、自作製する企業や個人も多い。

今年1月15日、伊丹の名勝や文化、歴史を描いたフレイム切手「伊丹の風景」が伊丹市に贈呈された。企画者は、伊丹桜ヶ丘郵便局長の堺洋之さん(50)。「写真。伊丹愛の強い堺さんは、伊丹市の姉妹都市、ベルギー・ハッセルト市からの訪問団に贈ろうと、伊丹に関するフレイム切手を作った経験がある。そのノ

ウハウを活かし、より幅広く買ってもらえる切手を作ろうと、郵便局仲間や地元市民の協力を得ながら、自ら写真を撮り今回の発行にこぎつけた。

モチーフには、荒牧バラ公園や昆虫館など、伊丹を象徴する風景や建物を選んだ。本紙の発行元「ことば蔵」も、酒蔵をイメージして作られた外観が伊丹らしさを象徴しているとして採用。

手元に置いておくのもよいが、「伊丹の郵便局20局がそれぞれ特徴のある消印(風景印)を作っている。この切手を使ってぜひ郵便を出してほしい」と堺さん。

「伊丹の風景」切手は、伊丹・尼崎両市内の全郵便局で販売中(なくなり次第終了)。価格は82円切手が10種類で、1シート1300円。

(細尾 哲也)

現代人物 風景



福祉に興味に大活躍の「いけやん」

写真協力=西田写真館

「おう、いけやん」。イベント会場にこの人が姿を見せると、行く先々で声がかかる。福祉や趣味の分野を中心に交流を広げ、地元伊丹と隣の尼崎市では、ちょっとした有名

人だ。本職は、手技療法士。デザイナーやハリハビリの施設へ出向いて施術。親と同じくらいの年代の方の世話

手技療法士

池田安久さん(67)

真を生かして学校便りの制作などで活躍した。次年度にはPTA会長になり、市内他校のPTAとも付き合うようになった。息子が高校生になると、授業の一環として市内の商店主と店のPRを一緒に

をする、高齢者を理解する気持ちと心を学べるという。もともとは食品メーカーに勤務。商品開発に33年間携わっていたが、体調を崩し、54歳の時に早期退職を決意。親の面倒がみやすいと、今の職業に変えた。

そのころ、息子の通う中学校のPTA広報担当を引き受け、趣味の写真を生かして学校便りの制作などで活躍した。次年度にはPTA会長になり、市内他校のPTAとも付き合うようになった。息子が高校生になると、授業の一環として市内の商店主と店のPRを一緒に

老舗探訪

花清花園

伊丹市宮ノ前2-4-30
☎072-782-4187



出荷に向け花の手入れをする店主の今中さん

「嵯峨乃流御用達の看板が掲げられていた。今中さんは、国産の花にこだわっている。輸入ものは安い、四季のある日本とは違う環境で育ち日持ちがしない。「国産は生けたら本当に立派なんや」と断言する。

大正時代に宮ノ前で創業。今の3代目店主、今中能範さん(71)は、元は従業員で、二代目の酒井清次さんから教えを受け、昭和57年(1982)にのれん分けで屋号を引き継いだ。

得意先の多くは、生花教室の先生。華道5流派の教室に花を納めている。中でも嵯峨御流には、市内ではこの店だけが一手に花を納めており、店内には、家元である京都の大覚寺から寄贈されたという「嵯峨乃流御用達の看板が掲げられていた。今中さんは、国産の花にこだわっている。輸入ものは安い、四季のある日本とは違う環境で育ち日持ちがしない。「国産は生けたら本当に立派なんや」と断言する。

(龍田起代子)

伊丹俳壇

〔春〕坪内稔典 選
(佛教大学・京都教育大学名誉教授、
柿衛文庫也雲軒塾頭)

最優秀賞

春めくやパッチワークの鳥・鳥

戸川富士子 (大阪府豊中市)

俳句はちょっとした表現の工夫がとても大事。というか、ちょっとした表現の工夫が俳句の命みたいなものです。最優秀賞は鳥鳥・鳥と並列した工夫が春のにぎわいや元気をうまく表現しました。

優秀賞

商店街歩けばラララ春ですわ 屋部きよみ (伊丹市)

水色の産衣ぬいおり古稀の春 渡辺 啓子 (神戸市西区)

潮の香の窓に類杖春浅し 平 きみえ (伊丹市)

乳液のかがやく白さ春隣 小松 房子 (伊丹市)

路線図を右手に丸め春の旅 和田 康 (奈良市)

伊丹歌壇

〔楽器〕尾崎まゆみ 選
(玲瓏) 選者: 神戸新聞文芸短歌選者、
現代歌人協会会員

最優秀賞

街角に距離感のない音のしてバグパイプから溢れ出しおり 須磨 堂 (神奈川県鎌倉市)

街角でギターの演奏などに出会うことは多いけれど、バグパイプは珍しい。独特の音を「距離感のない」と表現した感性が素晴らしい。いろいろなもの、いのちを奏で始める春ですね。

優秀賞

春風が笑顔で街を訪れる楽器のように花芽揺らして 海実 (山形県鶴岡市)

金管で火喰鳥の声を真似てもう少し森の中によい 堺 紀彦 (滋賀県高島市)

マウンドの君に届けと息を吐くトランペットの銃口を向け 近藤さつね (群馬県高崎市)

吹き口を息を入れればいいだけよ妻が謀る手ごわきオカリナ 和田 康 (奈良市)

彼方此方に置いてあるもの奏でればどんなモノでも演奏できぬ 家内 守 (愛知県丹羽郡)



次回の兼題は、俳壇は「暮(ひきがえる)」、歌壇は「買い物」とします。応募は1人各1作品、自作未発表作品に限る。応募締切は、4月15日(必着)。最優秀賞には図書券千円進呈。左のQRコードを利用すると、ケータイからも応募できる。問い合わせは、ことば蔵へ。

住友電工が過去最高の11位

ニューイヤ―駅伝 創部 90 周年で奮闘



2区の選手ヘトップでたすきを繋ぐ遠藤選手 = 元日、群馬県高崎市で

本市を拠点とする住友電工陸上競技部が今年元日、群馬県で開催された全日本実業対抗駅伝競走大会(ニューイヤ―駅伝)で過去最高の11位という好成績を収めた。

出場は4回目。一昨年は38位という悔しい結果に終わったが、今年は1区のルーキー、遠藤日向選手がスタート約2キロ地点から上位を維持し、34分55秒で区間賞を獲得。その後一時順位を落としたものの、徐々に追い上げ、最終7区の藤村行央選手が約13・6キロ地点で先頭集団に追いつき11位でゴールした。渡辺康幸監督は「今年は選手全員が持てる力を出しきることができた結果、上位へランクアップできた。今後も上位へ食い込んでいけるチームにしたい。また区間賞の遠藤は、将来的に日の丸をつけて世界の表彰台に上る選手に育てていきたい」と話している。



林やよい
伊丹市在住。毎日新聞兵庫版にイラストエッセイ「くるまいますまいる」を連載中。

2月3日は「節分」だ。午前中は幼稚園や小学校に、赤鬼・青鬼に扮して豆を撒きまく。

「悪い子はいないか」と大声を出すと、わあわあ泣く子もいれば、すたすた逃げる子も。だが5・6年生にもなると、すくすく寄ってくる。

午後は尼崎の富松神社へ。夕方7時ごろから、その年の年男が棒をつけて豆を撒く。ちよんど年男と知り合

いだつたので、えへらえへらとリュックを背負い、境内へ向かう。

境内に着くと、すでに神社の氏子さんら二百人ぐらゐが来ておられ、両手に袋を広げてぎらぎらと待っており

て平成20年(2008)から市陸上競技協会との共催で小・中学生を対象に、基礎練習や体幹トレーニング、バトンパスなどの指導を行っている。また、今年で7回目となる



酔後録

▼恩人に並んだ!?
今号の1面に森本氏が書いてくださった「伊丹公論」は復刊19号となり、創刊者の小林杖吉氏が発行した数と並んだ。

「住友電工陸上フェスタ」が10月21日(日)に住友総合グラウンド(瑞ヶ丘2丁目4)で開催され、200メートルなどで日本記録を狙う「日本記録挑戦会」やリレーで競う「住友電

館という組織による発行を単純に比較はできないが、号数が並んだことから、小林氏への恩返しと思っ

▼十九杯目
今宵は小林氏、むかひ生氏のことを想い、十九杯目の乾杯だ。

熱燗の季節真っ只中とあって生酩酊り、山廃造り



(ときわ喜多)



福は内 鬼も内

私も「来てるよ」と心の中で言ってみた。手も振ってみたが、彼はちよちよこと前の方へ撒き、遠くへはコントロールが効かないのか、私は一つもゲットできなかった。なるべく子どもたちを目標にしてお菓子やみかんなどを撒いていたようだった。

ことば蔵では、本紙「伊丹公論」の編集委員を募集しています。伊丹の歴史や文化、まちな情報と一緒に発信しませんか。伊丹公論は年4回発行され、毎月3カ月かけて編集しています。第1回編集会議で記事内容を決定し、編集委員はそれぞれ担当する記事の取材と原稿作成を行い、第2・3回会議で見出しや本文、写真の配置などの校正をメンバー全員で行います。

編集委員大募集

次号復刊第20号の編集会議は、3月6日(火)、4月17日(火)の午後6時半から1階交流フロアで行います。伊丹の歴史に興味のある方、伊丹の魅力をPRしたい方、文章を書くのが好きな方はぜひ一度ご参加ください。問い合わせはことば蔵交流事業担当へ。

「工杯」など実業団や大学の強豪チームが集結する大会のほか、トップ選手との交流会や陸上教室なども行われる予定だ。

など燗に合う酒を中心に飲んでいるが、さて何杯まで飲めるだろうか。今年も健康を維持しながら大勢の方と乾杯したいものだ。